少年時代の義経年表

『義経記』による。「＊」は不明を表す。

西暦	月日	事柄
一一五九	＊・＊	源義経生まれる。幼名牛若。父は源義朝、母は常盤。
	一二・九	平治の乱起こる。源氏敗北し、源義朝ら没落。
一一六〇	一・四	義朝、尾張国野間で殺害（三八歳）。
	二・一〇	常盤、大和に潜伏。後に自首し、平清盛の妾となる。
一一六二	＊・＊	牛若、母の許を離れ、京都郊外の山科に住む（四歳）。
一一六五	＊・＊	牛若、鞍馬寺の稚児となり、遮那王と称する（七歳）。
一一七三	＊・＊	遮那王、僧正が谷で武術の修行に励む（一五歳）。**【鞍馬天狗】**
一一七四	二・二	遮那王、鞍馬寺を脱出し奥州へ向かう（一六歳）。
	二・四	遮那王、近江国鏡の宿で盗賊を退治する。**【熊坂・烏帽子折】**
	二・＊	遮那王、尾張国熱田で元服し、源九郎義経と名乗る。
＊＊＊＊	＊・＊	義経、下総国下河辺で陵兵衛の屋敷を焼く。
	＊・＊	義経、上野国板鼻で伊勢三郎義盛と主従の契約を結ぶ。
	＊・＊	義経、奥州平泉に到着。藤原秀衡の保護を受ける。
	＊・＊	義経、京都に潜伏し、鬼一法眼の許で兵法書を盗み読む。
	六・一八	義経、弁慶との対決に勝ち、弁慶を家来とする。**【橋弁慶】**
	＊・＊	義経と弁慶、奥州へ下る。

義経と弁慶の出会い

義経伝説の世界は極めて複雑である。義経と弁慶の出会いについても、『義経記』や、お伽草子の『弁慶物語』や『橋弁慶』など、文学作品によってさまざまなパターンがある。

	義経記	弁慶物語	橋弁慶
義経の状況	元服後（源義経）	元服後（源義経）	鞍馬寺稚児（牛若）
出会いの原因	弁慶の千本太刀奪い（コレクション）	弁慶の千本太刀奪い（円教寺再建材料）	義経の千人斬り（父義朝の供養）
出会いの場所	五条天神 清水寺	北野天神 法性寺 清水寺	五条大橋

お伽草子『橋弁慶』

《牛若の千人斬り》

さるほどに御曹司は鞍馬の寺にましますが、御歳十四の春の比、つくづく物を案じ給ふに、「今年ははや、父義朝の十三年忌と覚えたり。我代が代にてあるならば、堂塔をも建立し父の菩提を問ふべけれ共、世になし物の事なれば、菩提を問はん風情もなし。げにまこと、忘れたり。都に聞えし五条が橋と申せしは、敵平家の奴ばらが六波羅よりも都への行き来の道と聞ひて有。あの橋に罷り出、敵平家の奴ばらを千人斬りして、父の孝養に報ぜばや」と思し召し、……ここやかしこに忍び居て、敵平家の軍兵共がこれをば知らず都へ出づれば、つつと出てははたと斬り、つつと出でてはちやうと斬り、三日三夜と申には平家方の軍兵を七百余人ぞ討ち給ふ。

《弁慶の登場》

かゝりし時の折節、都五条が橋に於ひて、千人斬りのあるよしを、弁慶つぶさに承りて、「こは無念なる次第かな。此世の内に弁慶があらむ程は、かやうの緩怠さすまじきものを」と言ふまゝに、一間所につつと入り、黒革威の大鎧、草摺長にざつくと着、上帯結ってちやうと締め、一尺八寸の打ち刀、十文字に差すまゝに、三尺八寸の厳物作りの太刀佩いて、上に衣を着るままに、例の長刀杖に突き、嵯峨野を立ち出で、五条が橋へと急ぎける。道ならば、三町計こなたより、五条河原を見渡せば、千人ばかりの死骸を河原面に積んだるは、小山を築いたる如く也。さしもの清き鴨川も、皆紅にぞ流れける。弁慶、心に思ふやう、「あれほどの人数をなむなふ滅ぼす物ならば、只者にてはよもあらじ。わたり合ふては悪しかりなん。退くところ」と思ひ、長刀肩に打ち懸けて、嵯峨野を指ひて帰りけるが、道にて案じけるやうは、「げにまこと忘れたり。名にし負ふたる弁慶が、多くの死骸に驚き、敵に後ろを見せたりなんど言ふならば、後難也」と思ひ、また取って返し、五条が橋にも着きしかば、長刀の石突にて橋の板をどうどうと突き鳴らし、大の声音を差し上げて、「此程、ここもとにて存外の振る舞い、何よりもつて心得られず。たとひ、天魔波旬の変化なりとも、御出あれ。手並みの程を見せん」とて、こゝやかしこを尋ぬれども、辺りに人はなかりけり。

《牛若と弁慶の対決》

されども、こゝに弓手の擬宝珠の脇に、十四五の少人、衣引き被き、伏してあり。衣の内を見てあれば、頬、眉に薄化粧、歯先とつては鉄漿黒なり。翡翠の簪揺り下げて、さながら女の如く見えければ、弁慶、心に思ふやう、「我は聖僧の身として何者にてもあれ、女と見えつる物に言葉を懸けるは如何なり」と思ひ、長刀の石突を御曹司の召したりける足駄の歯にがんじと当て、さらぬていにて駈け通る。御曹司は御覧じて、「姿を見れば沙門なり。助けばや」と思し召しけれ共、「余りに振る舞ひ奇怪なり。さらば、手並みを見せん」とて、被ひた衣をさつと下ろせば、下は武者にぞ出立ちける。いづくにか持ちたりけん、友切丸の鞘外し、面も振らず懸かりける。弁慶も長刀は一手習ふたり、手をくだきぞ使ひける。それ長刀の切手には、込む手、薙ぐ手、開く手、後ろを斬るは中切、叩く闇討ち、捨て刀、随分大事の秘所の手をひとつも残さず使ひける。君は此よし御覧じて、面白き手をや使ふと心を静め見給へども、されども弓手を斬れば馬手に走り、馬手に合へば弓手に斬れ、裾を払えば虚空に舞い上がり、見えつ隠れつ、さながら化生の如くにて、やや共すれば弁慶は、討たれつびようぞ見えにける。「物々しやな、あれ程の小童一人従へざる口惜しさよ」とて、長刀の石突押取り伸べ、又斬つて懸かるが、如何はしたりけん、大長刀を打ち落とされて、呆れ果ててぞ立ちたりける。

弁慶あまりの不思議さに、言葉をかけてみばやと思ひ、「不思議や御身はいかなる人なれば、かほど健気にましますぞ」と申しければ、御曹司は聞こしめし、「今は何をか裏むべき、我は源義朝の八男、

牛若丸とは我が事也。御身はいかなる者ぞとよ」。弁慶頭を地に付けて、「今までは誰やの人ぞと思ひしに、さては牛若殿にてまして……【原本欠如】……衣引き被け、太刀を□担ぎ、鞍馬の山へと御供申し、東光坊に送り届け、その後また嵯峨野に帰り、行ひ澄まして居たりける。

此人々の心中は、上下万民をしなべて、感ぜぬ人はなかりけり。

能〈橋弁慶〉

※現行観世流謡本による。［　］＝小段名。「　＝コトバ。『　＝フシ。

四番目物。五流の現行曲。作者不明。

シテ―弁慶
子方―牛若丸
トモ―弁慶の従者
アイ―都の者

第一段　シテの登場・シテとトモの応対　弁慶は従者から五条の橋で人を斬る者の話を聞く

［名ノリ］　シテ「これは西塔の傍に住む武蔵坊弁慶にて候、我宿願の子細あつて、五條の天神へ、丑刻詣を仕り候、今日満参にて候程に、只今参らばやと存じ候

宝生流	シテ「是は西塔北谷の住僧、武蔵坊弁慶にて候、我宿願の仔細あるにより、此程東山十禅寺に、一七日参籠申して候、又今夜より北野へ丑の時詣で仕らばやと存じ候
金春流	シテ「これは西塔の武蔵坊弁慶にて候、われ宿願の子細あるにより、この間北野へ一七日参篭申して候、また今夜より十禅寺へ参らばやと存じ候
金剛流	して「是は西塔の傍に住居する武蔵坊弁慶にて候、扨も我宿願の子細候ひて、此間北野へ参詣申て候、又今夜より十善寺へ参らばやと存候
喜多流	して「これは西塔の傍に住まひする武蔵坊弁慶にて候、さても我宿願の子細有るにより、此程北野へ一七日丑の時詣仕りて候、又今夜より十禅寺へ参らばやと存じ候

［問答］　シテ「いかに誰かある　トモ「御前に候　シテ「五條の天神へ参らうずるにてあるぞ、その分心得候へ　トモ「畏つて候、また申すべき事の候、昨日五條の橋を通り候処に、十二三ばかりなる幼き者、小太刀にて斬つて廻り候は、さながら蝶鳥の如くなる由申し候、まづまづ今夜の御物詣は、思し召し御止りあれかしと存じ候

［掛ケ合］　シテ「言語道断の事を申す者かな、例えば天魔鬼神なりとも、大勢には敵ふまじ、おつとり籠めて討たざらん　トモ「おつとり籠むれば不思議に外れ、敵を手許に寄せつけず　シテ『手近く寄れば　トモ『目にも　シテ『見えず

［上歌］　地『神変奇特不思議なる、神変奇特不思議なる、化生の者に寄せ合はせ、かしこう御身討たすらん、都広しと申せども、これ程の者あらじ、げに奇特なる者かな。

第二段　シテの中入　弁慶は人を斬る者を退治するため五条の橋に行くことにする

［口］　シテ「さあらば今夜は思ひ止らうずるにてあるぞ、いや弁慶ほどの者の、聞き逃げは無念なり、今夜夜更けば橋に行き、『化生の者を平らげんと

［上歌］　地『夕べ程なく暮方の、夕べ程なく暮方の、雲の気色も引きかへて、風すさまじく更くる夜を、遅しとこそは待ち居たれ、遅しとこそは待ち居たれ。

第三段　アイの立働き　都の者が五条の橋で斬られそうになったことを語る

※和泉流は早打が一人で登場、大蔵流は都の者が二人で登場する。

第四段　子方の登場　五条の橋に着いた牛若は誰かが通るのを待つ

［口］　子方『さても牛若は、母の仰せの重ければ、「明けなば寺へ上るべし、今宵ばかりの名残なれば、五條の橋に立ち出でて、川波添へて立待に、月の光を待つべしと

［一セイ］　子方『夕波の、気色はそれか夜嵐の、夕べ程なき、秋の風。

［上歌］　地『面白の景色やな、面白の景色やな、そぞろ浮き立つ我が心、波も玉散る白露の、夕顔の花の色、五條の橋の橋板を、とどろとどろと踏み鳴らし、音も静かに更くる夜に、通る人をぞ待ち居たる、通る人をぞ待ち居たる。

第五段　後シテの登場　弁慶が大鎧を着て長刀を手に五条の橋へやって来る

［口］　シテ「既にこの夜も明方の、三塔の鐘も杉間の雲の、光り輝く月の夜に、著たる鎧は黒革の、縅しに縅せる大鎧、草摺長に著なしつつ、もとより好む大長刀、真中取つてうち擔ぎ、ゆらりゆらりと出でたる有様、『如何なる天魔鬼神なりとも、面を向くべき様あらじと、我が身ながらも物頼もしうて、手に立つ敵の、恋しさよ

第六段　子方とシテの応対　弁慶は牛若を女かと思うが牛若が弁慶を挑発して戦いが始まる

［掛ケ合］　子方『川風もはや更け過ぐる橋の面に、通る人もなきぞとて、心すごげに休らへば　シテ「弁慶かくとも白波の、立ち寄り渡る橋板を、さも荒らかに踏み鳴らせば　子方「牛若彼を見るよりも、すはや嬉しや人来るぞと、薄衣なほも引き被き、傍に寄り添ひ佇めば　シテ「弁慶彼を見つけつつ　【立廻リ】

［掛ケ合］　シテ「言葉をかけんと思へども、見れば女の姿なり、我は出家の事なれば、思ひ煩ひ過ぎて行く　子方「牛若彼を嬲つて見んと、行き違ひさまに長刀の、柄元をはつしと蹴上ぐれば　シテ『すは、痴者よ物見せんと

［中ノリ地］　地『長刀やがて取り直し、長刀やがて取り直し、いで物見せん、手練の程と、斬つて懸れば牛若は、少しも騒がずつつ立ち直つて、薄衣引き除けつつ、しづしづと太刀抜き放つて、つつ支へたる長刀の、切先に太刀打ち合はせ、詰めつ開いつ戦ひしが、何とかしたりけん、手許に牛若寄るとぞ見えしが、畳み重ねて打つ太刀に、さしもの弁慶合はせ兼ねて、橋桁を二三間、退つて、肝をぞ消したりける。

第七段　シテの立働き　弁慶と牛若は激しく戦うが弁慶は圧倒されて茫然とする

［中ノリ地］　地『あら物々しあれ程の、あら物々しあれ程の、小姓一人を斬ればとて、手練にいかで洩らすべきと、長刀柄長くおつ取り延べて、走りかかつてちやうと斬れば、背けて右に飛び違ふ、

取り直して裾を、薙ぎ払へば、躍り上つて足もためず、宙を払へば頭を地につけ、千々に戦ふ大長刀、打ち落されて力なく、組まんと寄れば斬り払ふ、縋らんとするも便りなし、せん方なくて弁慶は、稀代なる少人かなとて、呆れ果ててぞ立つたりける。

第八段　結末　弁慶と牛若は名乗り合って弁慶が牛若の家来となる

［中ノリ地］　地『不思議や御身誰なれば、まだ稚き姿にて、かほど健気にましますぞ、委しく名のりおはしませ　子方『今は何をか裏むべき、我は源牛若　地『義朝の御子か　子方『さて汝は　地『西塔の武蔵、弁慶なり、互いに名のり合ひ、互いに名のり合ひ、降参申さん御免あれ、少人の御事、我は出家、位も氏も健気さも、良き主なれば頼むなり、粗忽にや思し召すらんさりながら、これ又三世の機縁の始め、今より後は主従ぞと、契約堅く申しつつ、薄衣被かせ奉り、弁慶も長刀打ち擔いで、九條の御所へぞ参りける。

能〈笛之巻〉

※現行観世流謡本による。［　］＝小段名。「　」＝コトバ。『　』＝フシ。

四番目物。観世流の現行曲。作者不明。

シテ―常磐御前
子方―牛若丸
ワキ―羽田秋長

第一段　ワキの登場　羽田秋長は牛若のことを常磐御前に相談しようと言う

［名ノリ］　ワキ「かやうに候者は、義朝の御内にありし羽田の十郎秋長にて候、さても義朝の御子常磐の御腹には三男、牛若殿と申して御座候を、学問の為に鞍馬の寺へ御上せ御座候処に、学問をばし給はで、夜な夜な五條の橋に出で、数多の人を御斬り候、上下の煩ひかたがた以つて然るべからず候程に、常磐の御方にまゐり、この事を御教訓させ申さばやと存じ候

第二段　ワキとシテの応対　羽田秋長の話を聞いた常磐御前は牛若を呼び出す

［問答］　ワキ「いかに申し上げ候、秋長が参りて候　シテ「なに秋長と申すか、此方へ来り候へ、さて只今は何の為に来りたるぞ　ワキ「只今参る事余の儀にあらず、鞍馬の寺に御座候牛若殿、夜な夜な五條の橋に御出であつて、数多の人を御斬り候、上下の煩ひかたがた以つて然るべからず候へば、此方へ御申しあつて、御教訓あれかしと存じ候　シテ「さて牛若殿は何処に渡り候ぞ　ワキ「あれに御座候　シテ「此方へと申し候へ　ワキ「畏つて候　ワキ「いかに牛若君に申し候、此方へ御参り候へ

第三段　シテと子方の応対　常磐御前は牛若に学問に励まないなら親子ではないと言う

［問答］　シテ「いかに牛若殿、この程は寺にあるかとこそ思ひしに、何とて此方へは下りたるぞ　子方「さん候久しく母上を見参らせず候程に参りて候　シテ「いやいやおことの心を見るに、思ふと言ふも虚言よ、この程平家の公達の肩を並べしを争ひ、同じ寺中にありとても、学問にだに勝れなば、他山の聞こえ寺家の覚え、かたがた母も嬉しう思ふべきに、学問をこそせざらめ、夜な夜な五條の橋

に出で、人を失ふ由を聞くぞとよ、真さやうにあるならば、母と思ふな子とも又、
［下歌］　地『思ふまじげによしなやな、かほどに母は思へども、そのかひ更になき上は、叱りても由ぞなきうたての者の心や。

第四段　シテの述懐　常磐御前は平治の乱後に牛若を連れて避難したことを思う

［上歌］　地『よしやよし親子をも、よしやよし親子をも、思ひ思はぬ仲ならば、なかなかに安からぬ、御身の為は然るべし、如何なれば畜類、又は空飛び翔る鳥も、その理を知ればこそ、鳩に三枝の礼をなし、烏きうきうの、孝行なるは如何ばかり、などや御身は不孝なると、叱れば牛若も、手を合はせ立ち寄りて、免し給へと泣き居たり。
［(クセ)］　地『おことまだ、いとけなかりし時よりも、父に離れて無慙やな、敵の手にも渡りなば、如何なる淵川の、瀬にも沈みもやせましと、心に懸けて思ひ寝の、夢の一時、花の夕べの山風、声高く泣く時は、六波羅の人や若し、聞くらんものを悲しやと、忍びて落ちしも、いま思ひ出の涙かな。

第五段　シテの物語・中入　常磐御前は牛若の笛の由来を語って聞かせる

［ロンギ］　子方『母の仰せの重ければ、明けなば寺へ上るべし、さりながらこの笛に、得たる便のあるぞとは、如何なる謂はれ候ぞ　シテ『げに理の不審かな、これは弘法大師とて、尊き人の御笛を、伝へたる故なれば、かやうに我も言ふぞとよ　子方『そもや大師の御事は、久しき事と聞くものを、伝へ給ふは如何ならん　シテ『これはもと入唐の、商人持てる笛なるに、その虫喰のあるぞとよ　子方『さては証の何ぞとも、現し給ふ文字やらん、委しく語りおはしませ　シテ『これ御覧ぜよ今までは、人にも隠し御身にも　子方『見させ給ふ事もなきに、
［歌］　地『今こそ委しくは、見も明石潟島隠れ、並ぶや蝉のもとに、巻き隠したる錦を、解きてよく見れば、不思議やな虫喰の、一万五千、三百余歳経て、弘法大師の御手に渡りその後に、義朝の末の子、牛若が手に渡るべしと、確かなる虫喰、かたじけなやと戴き、明けなば寺に上るべし、構へておこと偽るな、又よと母は言ひ捨てて、常の住処に入りにけり、常の住処に入りにけり。

第六段　子方の中入　牛若は羽田秋長に今日は五条の橋へ赴くと語る

［問答］　子方「いかに羽田、母の仰せの重ければ、明けなば寺へ上るべし、今宵ばかりの名残なれば、五條の橋に出で、立待に月を眺めうずるにてあるぞ　ワキ「畏つて候

幸若舞曲「笛の巻」

……常葉、心に思し召す。「それ、稚児のもてあそびに、何々と申すとも、管絃に過ぎたる事はなし。その中にとつても、笛は一の名物なれば、よからん笛を求め、鞍馬へ上せ、牛若に取らせばや」と思し召し、都間近き淀の津の、弥陀次郎が許よりも、笛を一管買ひ取て、鞍馬へ上せ給ふ。……
……葱嶺の山の麓に、一つの滝落る。かの滝の双岸に、三本の竹有。弘法、剣を抜き持つて、末の節を三節込めて切り給ひ、「契りのあらば、日本にて巡り会へや」との給ひて、川にぞ流し給ひける。……ある磯辺を通らるゝ。寄竹一つ有。怪しく思召れて、取り上げ御覧ありければ、天竺流沙河にて切り流したる竹で有。……三管の笛に彫り給ふ。大水竜、小水竜、青葉の笛と申す。……